

② 「指導と評価の一体化」を図り、「考える力」を引き出す「評価の工夫」

北海道札幌市立北翔養護学校

校長 川瀬 雅之

1. はじめに

前回、「公共」をイメージした「授業デザイン」として、「問い」と「学びの過程」を中心に「指導方法」の実践事例を紹介させていただいた。

今回は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を柱とする資質・能力の育成をめざした「評価の工夫」について、特に「指導と評価の一体化」に留意した実践例として、単元を通した授業展開、短い時間を継続的に活用した取り組み、課題学習の指導による「パフォーマンス評価」の工夫を紹介する。

2. 単元を通した学習過程の評価

1) 「覚える」授業から「考える」授業へ

「公共」においては、「知識・理解」に留まる「覚える」授業から、自ら学び「考える」授業づくりへの転換が期待される。「考える」ためには、「自分の理解状態を自己診断できる力」つまり「メタ認知」が求められる。生徒一人ひとりに「メタ認知」させる工夫を、単元を通した学習過程の中に、「診断的評価」「形成的評価」「総括的評価」として織り交ぜ、授業展開を工夫していくことが大切である。

2) 単元を通した評価

学習前の生徒に対してまず「診断的評価」を工夫し、既習の知識や考え方の実態把握を行い、次に単元の「学習課題（主題）」に取り組む学習過程において「形成的評価」を重ね、最終的にどのような学習の成果が見られたのかを見取っていく

「総括的評価」を行う。授業展開の過程で、学習の達成状況を、生徒と教師、生徒同士が相互に確認でき、学習の手応えとしての自己効力感を感じながら学習意欲を高め、生徒が各自の学びについての「自己調整」に取り組み、成果としての変容を達成し、学力の「自己更新」をすすめていく。このような学習過程の評価の具体的な方法は、前回紹介した実践事例を参照していただきたい。

3) 「評価規準」の設定

新学習指導要領解説の『総合的な探究の時間編』に「評価規準を学習活動における具体的な生徒の姿として描き出し、期待する資質・能力が発揮されているかどうかを把握する」「具体的な生徒の姿を見取るに相応しい評価規準を設定し、評価方法や評価場面を適切に位置付ける」(p135)とある。「公共」の授業においても、生徒にどのような資質・能力を、単元を通した学習で身に付けさせるのか。具体的な生徒の姿が見取れるような単元目標と評価規準を設定することが重要である。

4) 成果と課題

具体的な授業展開の場面で、一定の基礎的知識を生徒に平準的に身に付けさせる場合、配布資料やワークシートを活用することが有効である。

ただし、単純な作業学習にならないために、キーワードを設定して資料読解させたり、「立場」や「視点」を指定して学習課題に取り組ませるなどの工夫が必要である。さらに、教師の役割として、授業において生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にし、そのために最適な教材を研究し用意すること。また、授業の中で学問的な背

景等の「知見」を含んだ指導助言（「コメント」）を適宜発して生徒の学びを進めることが大切である。

3. 生徒間の「相互評価」の工夫

自ら発表すると同時に、他者の話をしっかりと聞く力を養うことをめざして、「現代社会」のまとめの時期（年明けの1～3月頃）に、下記のような要領で実施した「3分間スピーチ」を紹介する。短い時間を継続的に活用した事例として、学習の効果が期待できる取り組みである。

1) 「3分間スピーチ」の「目的・ねらい」

取り組みの目標を、「現代社会の変化をとらえ、変化に対応する力を身に付けよう。」とし、スピーチの統一テーマを「現代社会の〇〇〇化について」として「〇〇〇化」を選択設定させた。

生徒の考えや意見を表明する力、聞く力の育成をねらいとして、次の3点を学習活動に盛り込んでいる。1つ目は「現代社会」における学習の成果を踏まえながら、自ら興味関心のある課題を選択させること。2つ目はその課題についてその事象を課題としてとらえた内容と選択した理由を、A4判1枚のレジュメ（文字情報ばかりでなくイラスト等も要求）にまとめ発表させること（印刷し発表時に全員に配布）。3つ目は他者の発表を聞き「感想」以上の「コメント」をさせること。これにより生徒間の「相互評価」を図る。

生徒間の「相互評価」として、1人の発表者に対してクラス全員から39通の「コメント」を記入した用紙が直接渡される。簡略なもの、辛口のものもあるが、よかった点を褒めあうことを基本とし、発表者の励みとなることを期待した。

2) 事前の指示・指導事項

- ① 現代社会を特徴づけると考える「〇〇〇化」の〇〇〇に入る現象（変化）を各自一つ選択。
- ② ①で選択した現象（変化）を選んだ理由・根拠をスピーチの中で、はじめに明確にする。
- ③ 「〇〇〇化」に対応するために社会全体としてどのような取り組みが必要か考えを述べる。
- ④ 自らの課題として、「〇〇〇化」に対応して

どのような力を身に付けたいかを述べる。

- ⑤ 3分間スピーチ全体を通して、クラスの皆へ何らかのメッセージを伝える。内容は自由。
- ⑥ 2分30秒から3分以内にスピーチをまとめる。目安は400字詰原稿用紙3枚程度の台本。

3) 取り組みの流れ（実践の展開）

- ① 各自、スピーチのテーマを選択し決定。
- ② レジュメ（配布資料）の作成・提出。
スピーチの内容を箇条書きにし、関連する図表やイラスト等も描く。そのまま印刷し、全員に発表当日配布。
- ③ 発表準備。発表用の台本を各自準備。この台本については発表者の手元のみ用意。
- ④ 授業の冒頭に、1時間に5人ずつスピーチ。
※この事例は10時間での実践であったが、実施期間が確保できれば1時間に2～3人が適当。
- ⑤ 発表を聞いての「コメント」を用紙に記入し発表者に直接手渡す。相互の励まし、「相互評価」とする。

4) 成果と課題

「継続は力なり」の言葉がある通り、毎時間の積み重ねによる学習効果は大きい。他者との協働学習を重視する「公共」において、自ら課題を設定して発表するとともに、他者の発表を聞き取り、興味関心を知り、共鳴し共感しながら学習成果が共有され、相互に評価しあう場を持つことは、学びの意欲を高める点においても有効である。

課題としては資料印刷等の手間がかかる点であるが、生徒が他者の発表を聞きながら、「コメント」するために配布資料にメモを書き込むなどの取り組みも見られ、ぜひ手元に資料配布したい。

4. 「パフォーマンス評価」の工夫

「公共」においても、課題学習の方法の一つとして、レポートや小論文などを課して、資質・能力の育成に結びつけていくことが期待される。

表現活動や表現物などの実績や成果をもとに評価する「パフォーマンス評価」として、小論文の指導（個別の添削指導を含む）過程における「評価の工夫」の実践事例を紹介する。

1) 小論文指導の「目的・ねらい」

- ① 生徒に「学習課題（主題）」をしっかりと自己認識（メタ認知）させる。
- ② 課題学習として実施する小論文を通して、既習の知識や概念を適切に活用できる「学力」を身に付けさせる。

2) 小論文指導の「目標」

- ① 生徒の「考えや意見」「主張」「抱負」等を、抽象的な感覚の段階から掘り下げ、「語彙」を拡充し、身近な動機（きっかけ）、根拠・論拠にもとづいて表現させ、具体的かつ確実なものとして本人に認識させる。自分が言いたいことをメタ認知させる。
- ② 課題の分量（文字数等）を満たし、設問の意図を把握し、課題文等を読解（活用）し、必要不可欠な要素を選択（判断）して、指定された形で表現できる力を身に付けさせる。
- ③ 文章表現した事柄の「要点」を口頭で簡潔に説明できる力を身に付けさせる。

3) 小論文指導の具体的な方法

(1) 小論文についての理解

残念ながら、小論文についての理解不足が、実際の指導の場面においてよく見られた。そこでまず次のような基本的な理解を図る指導を行う。

- ① 小論文は「相手」を想定し、問われた課題について、論理的に「相手」との「対話」を進めるためのもの。
- ② 「設問」や提示された課題文、資料・データ等についての読解力と論理的な思考力・対話力が重要。課題として提示された「設問の条件」を過不足なく満たす。
- ③ 「5W7H」は、提示された課題文、資料・データ等から「課題」を明確にするための視点。必要な「情報」を抜き出し活用する。
When (いつ) Where (どこで) Who (誰が)
Whom (誰に) What (何を) Why (どうして)
Which (比べて)
How to do (どのように) How much (いくらで)
How many (どのくらい) How long (いつまで)
How about (どう捉えているか)

- ④ 独りよがりにならないように、小論文の「採点のポイント」などを意識して「推敲」する。
 - ・課題文・資料・テーマを読み取れているか。
 - ・課題の求めているものや出題意図を正確に理解できているか。
 - ・問題意識、問題発見や問題解決があるか。
 - ・論理的かどうか。論旨の一貫性があるか、筋が通っているか。
 - ・課題に対する知識や教養が、どの程度あるか。推薦入試などでは、学部・学科に関するテーマについての知識が評価される場合が多い。
 - ・自分の考えが明確に述べられているか。自分の主張に、具体的な資料・根拠がつけられているか。自分の主張に対する反論とそれに対する再反論が書かれている小論文は評価が高い。
 - ・前向きで、まじめで、積極的な人物か。
 - ・字数に過不足はないか。
 - ・誤字・脱字がなく、漢字や送り仮名は正しく使っているか。読点（、）などが正しく表記されているか。文章の構成、文体（ですます調）、用語が適切か。
 - ・原稿用紙の使い方に誤りはないか。

(2) 小論文指導における教師の役割

- ① 生徒に対して、「対話の相手」となる。
- ② 「教えて、考えさせて、揺さぶる」指導の流れをつくる。まずは確かな課題の指示と適度な情報を教える。その際、情報を与えすぎないことが肝要。次に考えさせて、「教えたこと」を確認させ、「教えられたこと」を活用して問題解決させる。自分の理解の状態を自己診断させ、自己診断した内容を表現させる。さらに生徒が誤解しがちな、又は誤解している点を指摘して揺さぶる。既習事項や関連事項の応用・発展を促し、試行錯誤による技能の向上、もう一工夫ができないか問いかける。
- ③ 学習活動のまとめとして、生徒には常に「進路の目標（志望）」「将来への夢・抱負」など、将来の進路実現に向けた取り組みを意識させる。

(3) 生徒と対面しての具体的な指導方法

- ① 「設問の意図」(何が求められているのか)を

生徒自身に説明させる。「出題者の意図」等の把握を生徒自身に自己認識させる。曖昧な説明の場合には「なぜ」「どうして」「何が」を繰り返して追求し掘り下げる。

② 次に示す「問いかけ」を行い、生徒が作成した小論文の「分析」を行う。

Q 1: 「設問（課題）」に答えているか？

→文字数を満たし、誤字脱字がなく、その他内容要件の充足は当然として、「要約」要求、「縮約」要求、「テーマ把握」要求、「論点・争点提示」要求、「事項抽出」要求、「根拠提示」要求、「意見表明」要求などに答えているか？出題者の求めている課題に、過不足なく答えているかを問う。まず量的な充足度を生徒とともに確認し、次に質的な完成度を問うていく。

Q 2: 設問への「解答」（生徒の発想・思考）が具体的である（説得力がある）か？

→抽象的な表現に対して、生徒の答えに「なぜ」を5回繰り返して掘り下げさせる。キーワードから「連想」又は「系統樹思考」で関連事項の拡充を図ってやる。一般的な「常識」の範囲から脱皮させる。

→「借り物の意見」を指摘し、身近な体験に根ざした内容・表現を考えさせる。

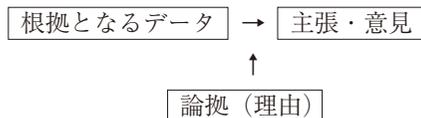
→「自分の解答」を獲得させる。

Q 3: 「語彙」が適切に使用されているか？

→基本的な知識量とその理解の深さを確認させる。「わかったふり」「素朴な（あいまいな）理解」を許さず「明解な理解」（簡潔に口頭で説明できるレベル）を生徒に対して要求する。抽象的な語彙を的確に使用できるようにアドバイスする。

Q 4: 文の構成が論理的であるか？

→要素分析：



「論拠」の内容が「根拠データ」と「主張・意見」をつなぐ役目をする。（トゥールミンモデル）

→論理構成：

・三段論法

「 $A \rightarrow B, B \rightarrow C, \text{ゆえに } A \rightarrow C$ 」

・対偶「 $\overline{B} \rightarrow \overline{A}$ ならば $A \rightarrow B$ 」

・○結論が先 ×起承転結

・接続詞の使い方

・主体の統一（係掛け）

・結論（主張・意見）の明確さ

→文章表現：

・設問の文章に続けて読んだときに、自然な文章となるか生徒自身に確認させる。

○○は何か？ → （○○は）△△である

・指示語の多用がないか。「これ・それ・あれ」が何を示しているかを確認させる。

・原稿用紙の使い方／文末表現の統一／引用箇所の適切さ 他

Q 5: 提出期限までに完成できるか？

→「課題」である以上、提出期限内に小論文を完成させる。

4) 成果と課題

概要ながら以上の課題学習としての小論文指導は、「パフォーマンス評価」における「指導と評価の一体化」の実際を示す事例である。

一連の学習活動とその指導は、確かに時間と手間のかかるものであるが、生徒一人ひとりの学びを深化させ、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を柱とする資質・能力の育成を図るものとする。

5. 結びに

知識伝達を主軸とする Teaching から、深く考える力の育成を目指す学習者主体の Learning への転換に対応した「公共」の授業において、学ぶ意欲を高めていくことが重要であると考え。今回取り上げた「評価の工夫」の目的もこの点にある。

今回は「社会に開かれた教育課程」における「公共」の授業づくりと「公共」への期待について、校種間の連携や他教科との連携などの実践事例も取り上げながら考えていきたい。